

世たかむい

発行古平町史編纂室
古平町文化会館
第176号平成16年5月1日
84212590

年表で読む

古平の歴史

《83》

古平のコンブ漁

1

■自家用としてのコンブ

古平では大正末期の鯨漁がそろそろ減退する頃でも、鯨漁の占める生産高は漁業のおよそ七〇八割を占めていた。

コンブやテングサ、ギンナンソウなどの海藻（海藻）類も採取されていたが、年の生産額は千五百円程度で、漁業全体の百四十万円に比べると微々たるものであった。

古平のコンブはホソメコンブで、道南や道東方面のコンブに比べて品質が劣るため、松前藩当時から商品として流通することとはほとんどなく、多くは自家用として利用されていた。

■物産税制一覽から

明治八年の《札幌管内各郡諸

物産税制一覽》に、コンブ漁の一端を見ることが出来る。

「余市船一艘二付二十貫目、古平船一艘二付十八貫目、美国一人二付金七十五錢、積丹船一艘二付四貫結十五丸（コレハ六十貫目ナリ）」と、着業船一隻の税額を示している。また、「昆布刈り舟ハ、西部ニテハ磯舟、ホッチ舟ヲ用イルナリ、磯舟ハ四石、ホッチ舟ハ十石積ムト見テ平均七石ナリ、コノ目方二百八十貫（五五〇キ）ナリ、税ハコノ二割五十六貫（二〇五〇キ）ナリ」

明治時代になり、古平でもコンブを販売用として採取してい

たようである。

明治十三年になると、昆布税は鑑札一枚に付き四貫目結四把（五貫六キ）となり、八月納めとなった。

■食品添加物の禁止

あまり品質のよくないコンブは『刻み昆布』に加工して出荷していたが、加工の際に添加剤を使用することがあった。それについて明治九年、次のような達しがあった。

「刻み昆布を営業している者の中には、緑青（ろくせう）や銅片などで着色しているものがあるが、これは人体に障害があるので注意をするよう明治七年十月、本支庁から各郡内へ通達したが、外国産の染め粉や、中には砒石（びし）（薬毒）を含むものもある。今後、飲食物などへの着色販売は禁止する」

■コンブ漁の届け出

明治二十年、北海道水産規則が定められると昆布採取業者は届け出が必要になり、郡内でも

次のような届け出がある。

御 届

今般古平郡沖村ニ於テ、二十二年七月ヨリ八月マデ、昆布採取製造兼業ノ許可ヲ得候二付水産物営業人組合規則第一条ニ依リ加入仕候。此段御届仕候也

明治二十二年七月十九日

古平郡沖村 二十九番地

八反田善助

古平収税委員

関口利勝殿

届出之趣承認す

明治二十二年七月二十日

古平水産物営業人組合

収税委員 関口利勝 団

コンブの採取期日は古平漁業組合で決定していて、その日の天候によって可否を決めた。

コンブの採取用具は、二又棒（マッカ）、棹鎌（かま）を使用していて、二又棒を海中のコンブの根元に差しこんで巻き込み、取っ手を回してねじり取る。乾燥して二尺八寸（六十五センチ）に切り揃えたものを、五貫（約六八キ）を一束として製品にした。

大正一二年

(二月六日～一〇日までなし)

▼二月一一日

本朝八時一五分、小樽発の汽車に乗り余市着。余市一〇時発の末広丸に乗り、一二時帰宅する。海は上ナギで夏の海の如し。夜、信用組合一階で部落総会があり行く。追分、浪花節の余興があり、一時散会する。去る九日、新しいアバ縄が古平直行の平安丸で着く。私の店のほか町内でも競争になるだろう。店では一月から今までずい分と売ったので、まずしばらくは様子を見ることにする。

▼二月一二日

起床九時、今日も朝から天気快晴。去る八日から五日もナギが続く。こんなに天気が良いとまるで春が来たようだ。火防組合の巡回日で組合長の支店前に集合。一〇時から原田、④等と組になり、一条通りと浜通りを廻り、昼食後も巡回し、四時頃ようやく終わる。海は上ナギ、沖の汽船や漁船の通るものどかで春らしい。子供たちが浜で相撲

などして遊んでいる。今日も刺網八〇〇間出た。リングも三、四円売れる。

▼二月一三日

朝のうちはみぞれが降っていたが、一〇時頃から晴れて静かな天気になった。店は相当地に忙しい。父、妻、トミは禅源寺で花廻りがあるというので参詣に行く。午後一時頃、久し振りに銀行へ行き為替を振り込む。入

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【78】

修証儀を一八名全員と僧侶で読経する。一〇時帰る。今日、刺網が千間も出た。伏見宮貞愛親王殿下の国葬当日で、学校や銀行のほか興業等も休み、各戸で弔旗を立てて弔意を表す。

▼二月一五日

いよいよ春色となった。新聞を見れば、古平沖で探海丸(北海道水試調査船)の流し網に鯨一〇尾余りが入ったとのこと。

▼二月一六日

起床九時、朝から沖風が吹き戸外は寒いが雪は降らぬ。一二月、一月中は沢山降ったので今日は降らないのだろうか。店は相当地に忙しくなった。今日も刺網が二千間も出た。漁の間際になつて意外と出る。あと三千間程手持ちがあり、東洋製網へ五千間注文してあるが、この分だと不足かも知れない。田、各などへも電話で問い合わせたが値上りしている。美国④から五千間欲しいと言ってきたが、こちら品不足で出しにくい。

▼二月一七日

昨夜からヤマセが強く、今日もかなり波がある。店は刺網四千間余り出た。網の売れ行きがよく不足する見込みなので、小樽の新谷へ現金で注文した。山本へは二月に注文したのにまだ着いてない。「サシアミキヤクシヤツメ」と打電したら、夜になつて「一四ヒナミピンツンダ」と返電が来た。夜、和合会の貸方について帳簿調べをしてほしいとのこと、会長宅へ行き、一時過ぎ帰る。

▼二月一八日

船町方面を廻り、帰り畝に寄る。餅をご馳走になり五時頃帰る。古英丸が、小樽から荷物一〇個も積んで着く。忙しい。夜は静かで暖かい。この頃は日も少し長くなったようだ。

▼二月一四日

起床九時、今日も快晴。去る八日以来毎日の天気続きた。店は刺網支度で相当地に忙しい。午後三時、禅源寺で禅学会があり行く。和尚の説教があり、夜食を本堂で食べる。施餓鬼供養があり、

人の心も浮き立って、鯨で賑うのもあと少しだ。二十日頃には漁夫も入り込むとのことだ。熊さんはこの天気で、農園へ道路路つけに行く。午後からえびす倉の屋根の雪下ろしをする。天気続きで雪も大分消えた。今日、禅源寺の寺参りがあり父と妻が行く。私は店番。今日は割とひまであつた。夜、一枝さんの縁談の件につき佐渡へ問い合わせ状を出した。今日から古平に一年度増設電話二〇個所が開通した。

今日は快晴ナギで漁船は皆出た。古英丸も入港し小樽からの荷物五個余市から七個が着いた。子ども等は学校が休みで好天気なので、本陣の浜へ海草を取りに行く。二時間程も遊んで、何やらわけの分からぬ海草を取って来た。今日は家の中より戸外が暖かい。今日も刺網が千間程も出た。

▼二月一九日

朝から雪が降り時々吹雪く。また冬らしくなった。今日は学校で保護者会があり行く。九時に始まる。一年生になったトシの授業を見る。奈良先生の数学で、二〇までの数を加えたり引いたりする。教え方がなかなか上手なものだ。その後二年生の吉治の書き方の授業を見る。寿原先生の授業だ。終わって、裁縫室で校長からの話があり、家庭でも子どもの教育について、充分注意して行つてほしいのとこのとだった。続いて保護者会長の困主人の挨拶があった。その後は受持ちの先生との話があった。三時帰る。小樽田店員が来ていろいろ話をする。店は相当に忙しい。夜、困へ行く。真崎、若

林、平田さん等がいる。平田さんと若林さんが政治問題について意見を述べ合う。一一時帰る。

▼二月二〇日

九時起床。寒い寒い風が吹く。若林主人が帰られるというので、妻が新地まで見送りに行く。前に問い合わせた縁談のことで今日返事が来た。本人さえ異議がなければ賛成とのことだ。

▼二月二一日

ヤマセが吹き寒い日だ。父は

⑤主人の遺骨が来るというので新地へ行く。八時頃帰ってきた。店は割と閑散だ。

▼二月二二日

起床九時。天気快晴で小春日和のようだ。熊さんは農園へ行き、リンゴの樹の雪よけをする。本年は大雪のため、リンゴの枝折れが多いとのことだ。店は古英丸と富丸が来たので、荷物が

一一個も入り荷解きで忙しい。今日までのところ建網が一向に出ない。弥吉さんが佐渡から来られたので、佐渡の話をいろいろと聞く。酒肴を出し、八時頃まで話をする。夜は雪が降り、五寸程も積もる。

▼二月二三日

起床九時。雪が降り寒い。熊さんは入船町権平さんへ、注文の網やアバ縄などそりで運んで行く。店もポツポツ忙しくなってきた。しかし昨年よりは暇なようだ。美国④から、網とアバ縄五個を馬そりで取りに来る。細アバ縄はすいぶん出た。夜、父は⑤主人の通夜に行く。リンゴは毎日二、三円ずつ売れていくが、あと四、五〇〇斤になった。

▼二月二四日

漁夫の先発隊がこの頃見えるようになった。町中はこれから追々活気を呈してくるだろう。夜、困へ遊びに行く。山下さん、

幾井さん、弥吉さん等といろいろ話をする。酒が出る。一二時ころまで話をして帰る。

▼二月二五日

店は閑散だ。昨年の今頃は相当に忙しかったのに、今年はさっぱりだ。⑥の葬式で父は会葬に行く。紀州富屋の店員が来る。いろいろ話をし、昼食を出す。一時

の船で帰った。夜、杏へ遊びに行き、話をして一一時帰る。

▼二月二六日

起床八時。漁夫の姿も多く見られるようになった。船出し、雪

切りなども始まり、いよいよ鯨場気分になってきた。刺網八〇〇間程出た。夜、④から四〇反程の網の注文があり、一五円五〇銭で売却した。金額は多いが利益の無いのは閉口だ。

▼二月二七日

朝からチラチラ雪が降る。漁夫も六分通りは来たようだ。熊さんは午後から集金に出かけた。店もポツポツ忙しくなった。

積丹西河から三〇〇間買いに来る。群来村から五〇〇間の④から八分ロープ一丸取りに来る。リンゴも明日あたりで全部売り切れになる。夜、七時頃から風が吹き出し、海は時化模様になった。

▼二月二八日

朝から吹雪が激しく、板戸を閉めていた。熊さんは午後から集金に出かける。カレ網が切り上げるようだ。本年は思わしい漁が無かった上に、値段も安かった。結果も良くない。そのせいか集金の方もはかばかしく

ない。リンゴは、本年は意外に売れ行きがよく、今日も三円程出た。夜、和合会の件について困支

店へ集まり、いろいろと善後策について協議した。

(続く)

放浪の旅

大澤 文子

放浪——という文字を辞書で引いてみた。あてもなくさまよい歩くこととある。

行き先もきめず地図を片手に、足のおもむくまま、気のおもむくまま歩き廻ることであろう。歩調を合わせて肩を並べることもなく、待つこともなし、一人気ままに大道を闊歩し、見知らぬ地に空を眺めショーウィンドーをのぞく。

私はこんなひとり旅が好きだ。

水を打ったような清やかな朝のホームにやや速度をおとした列車が驀進してくる。忽ち起こる爽やかな風に短かめの髪をなぶらせる。そんな時は快感を覚える。列車の座席は快い安らぎを感じさせる。今までは読書の場所として、ハンドバックには必ず読みたい本を収め列車に乗ったものだが、近年頓に弱くなった視力を労り一切やめることにした。

眼をとじ眠る姿勢が私の考える場所となった。心の中ではいつも自問自答の葛藤の時が続く。

「お客さん！ お客さん！」駅員に肩をたたかれわれにかえり、一人いない小樽終点の列車から、あわてて飛びおりることもままある。

交通事故にはくれぐれも気をつけるように、と、運勢をみてる親切な歌友が常に言う。感謝し気をつけることにしよう。

数年前の六月のある日、私は夫に頼んでみた。

「四、五日小旅行してもいいかしら？……と、期待に反しころよく許可がおりた。心で詫びながら青空のもと小バッグひとつの軽装で上野へ飛んだ。北ぐにと違い六月の東京は暑い。翌朝、新大阪ゆきに乗る、昼近く樹齢千年という樟の木の聳えたつ熱田神宮の前に立つ。家族の幸せを祈り拍手を打つ。

境内の混み合う屋台の店先にきし麵を食べようと順番を待つ人ら。どこの茶店も満員で、境内の樹立ちの中に放し飼いのチャボ、家鴨がきし麵を食べている人の側をはなれない。箸できし麵をつまんでやるとバクバクコクンとのみこむ。面白くて二、三回やってみる。昨日お祭りがすんだばかりというが、年一回の祭事の時に「チャボ売りが売れない雄をここへ放してゆくんだよ」……と、人のよさそうなお店のご老人が教えてくれた。翌朝、電車で岐阜入りをする。昼すぎまでブラブラして、夕方五時半すぎ長良川の屋形船で鵜飼いを見ることにする。

浴衣がけで乗るようにとのことで、宿へ戻り宿の浴衣に着替える。浴衣の裾を気にしつつ、こわこわ船のへりをまたぐとグラツと揺れ思わず声をあげる。屈強な船頭が下着一つで鰯をあやつる。かかと半分がない草履が珍しい。うす暗くなってきた長良川、灯りをともした屋形船がつぎつぎ漕ぎだされる。やがて川ぶち近くに何十隻もの屋形船が両側へ並ぶ。

場所が定まるとそれぞれ重箱の馳走が渡され宴がはじまる。屋形船の風鈴の音と提燈の灯りが美しい。

夜に入り鵜飼いを見る位置もそれれきまり、九時すぎいいよ鵜のショーがはじまる。船の舳の先に吊された松明の火花がパチパチと散る。キラキラ輝く川の中に十数羽の鵜が一斉にもぐる。やがて水しぶきをあげて鮎をくわえた鵜が浮かびあがる。ホーッ！ ホーッと呼び声をあげながら男は綱をたぐりよせ鵜をつかまえ鮎をはきださせる。客のざわめきの中にシャッターの音がつづく。

不夜城の感をあたえる長良川の海鵜に何かあわれさを感じる。翌朝は何かもの悲しく胸を打つ都の音がなつかしく、西芳寺の苔寺へと米原ゆきの列車に飛び乗った。

× × ×

「おそいぞ！ 夫の声にふとわれにかえり飛び起きる。

いそぎ仕たてる味噌汁の香に夫の起きてくる気配。

ああ今日は夫に大事な会がある筈……そして私にも。

戦中 戦後
泣き笑いの
樺太漁場体験記
戦前 戦後

吉野 慶一郎

ソ連軍将校 彼の去った後の心づかい には、何と大きな紙包みと段ボール箱二個が置かれていました。

「こつちにも考えがある」と言ったソ連軍将校の一言を、私たちはとんだ誤解をしていたのでした。その意味を知ってひと安心、先程からの不安も吹き飛んで今度は大笑いになりました。

早速、紙袋を開けて見たところ、中には各自の特別夜間通行許可証付きの身分証明書が入っていました。しかも、氏名の上には音楽芸術家と記入してあるのを見て、「オレたちは芸術家か!」と、おかしさをこらえ飛び上がって喜ぶやら、ひとしきり歓声が沸き上がりました。

また、一方の段ボール箱には白い食パンをはじめ、バター、

ソーセイジ、牛缶、コーヒー、砂糖、たばこ等々、このところずうつとお目にかかったこともない、豪華な品々がぎっしりと詰まっていました。女子の団員たちからは「ユメみたい! 芸術家ともなると差し入れも豪華版なのねえ……」と、弾んだ声ももれていました。

しかし、これらの品をよく見ると、品物や容器のほとんどにアメリカ製のマークが付いていたのは、またまた驚かされました。考えてみると、ソ連軍の使っているジープやトラックもフォード製、乗用車はシボレーと言った具合にアメリカ製なのです。世界の二大国が、このような深い関係にあったことを改めて思い知らされました。現実には意外な方向へと進みま

したが、今はまず依頼された音楽会をどうするか、ということが当面の課題として残されたわけです。

再度すべきか これまでの断るべきか? ことを考えてみると、音楽会については、われわれの方から何か条件を出したり要求したわけでもないのに、向こうから誠意をもって頼んできたことであり、それに対して断る理由もないだろう。今後の日ソ友好に役立つなら、この際、頑張ってもう一度やろうではないか。

一同の腹も決まったようで、早速、ソ連軍将校の許に行き、「今日はいろいろとありがたうございました。皆で相談した結果、ご希望のようにもう一度開催することになりました。これらの練習もありますので、暫くの時間を下さい」

このような返答をしたところ将校は大喜びで、「よい返事をありがたう。私も安心しました。あなた方日本人はとてもいい人たちです」と、上機嫌でした。

再度の公演に 事態は全く意外な助っ人 予期しない方向へと進展したことから、何はともあれ練習に取りかからなければなりません。しかし、公演も二度目となると、プログラムの内容も少しは趣向を替えなければならぬし、さて、どうしたものかと頭の痛いところでした。実のところ、前回でネタ切れ状態でしたから……。

そんな時、全く思いがけない心強い助っ人が現れました。

当時、私たちの野田港から密航船が多く出港するという噂を聞きつけて、他の市町村から多くの人たちが移って来ていました。それがデマであったことがわかって元所へ帰ることも出来ずに、野田に止まっていた人たちがいました。

それらの人たちから、「私たちも仲間に入れて下さい」との申し出がありました。なんと聞けば、女学校の音楽の先生、大学の音楽部員、バイオリンやギター奏者、合唱団員だったりと、プロ級の音楽経験者ばかりだったのです。(続く)

古平いろはうた

2

か

開拓使

ここ、本陣の名を残す

◆なつかしい地名

戦後でもしばらくの間は、港町を通ると場所や地名にも土地柄がよく表れていた。

砂止め、おとこ石・おなご石、木工場、弁天サン、本陣などの名称があったが、今は形のあるものでは弁天サン・厳島神社が残っているだけで、昔を知る人でなければもう何のことかわからなくなってしまった。

◆運上屋(家)

徳川幕府の時代、蝦夷地と呼ばれていた北海道には原住民であるアイヌと、道南の一角に城を持つ松前藩があった。

その頃の蝦夷地は米がとれなかったたので、松前藩では藩士への給与として管理していた土地を貸し与え、そこでアイヌと交易(物々交換)をさせ、その利益を藩士への給与としていた。

その時の交易所、また、後に場所請負人となった商人が、場所を経営するための建物を運上屋と言う。

厳島神社を創建した岡田家は、一二〇年余りにもわたって古平場所の請負人であった。

しかし、そのうちにアイヌを使役するために序列をつけたり、幕府の規則を押しつけ、運上屋はそれを伝えるための場所として、商売のことよりも、次第に政治的に支配するための拠点として重要になってきた。

現在、古平にはその建物は残っていないが、余市では修築復元されている。積丹の絵図には来岸の運上屋が描かれていて、その場所に後に番屋が建てられたが、現在は改築されて旅館になっている例ある。

◆本陣の由来

やがて明治維新となり明治二年八月、蝦夷地は北海道と名付けられ、日本にとっての重要な国土として開拓が進められることになった。

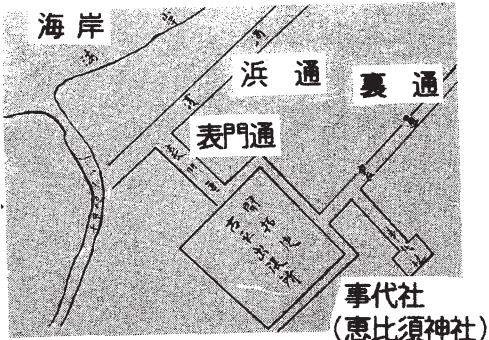
その任務を果たすため北海道に開拓使が置かれることになり、古平にも古平開拓使出張所が置かれることになった。

まず、開拓使から初めて十数か条の規則が出されたが、その中に「場所請負人を廃止すること」の一条があった。

古平では二年前の慶応二年、



⇒ 百七十年程前の古平郡絵図
チヨペタン川を挟んで右に
運上屋・左に御役宅四軒



↑ 開拓使古平出張所

種田徳之丞が岡田家から場所の権利を譲り受けていたが、それによって元運上屋は本陣とし、番屋があるときは脇本陣とするようにとの達しがあり、チヨペタン川縁の運上屋は本陣、入船町にあった番屋(山口浪さん住宅付近)は脇本陣となった。

明治三年、開拓使は元運上屋の本陣の建物を借り上げ、古平開拓出張所としたが、翌年これを買い上げ役宅とし、現在の町役場付近に平家の出張所を新設した。

これらのことから以後、この付近を本陣と呼ぶようになり、いつの間にかそれが地名になったのである。

— 札幌通信 第18信 —

わが生命のふるさとを想う

吉 川 義 雄

そこで生まれ、そこで育ったには、必然的な理由があるに相違ない。

幾星霜、ふるさとを離れて知る古平という土地の懐かしさ、愛らしさである。

幾山河越え去り行かば
寂しさの果てなん国ぞ

今日も旅行く 牧水

少年時代から愛唱していたこの歌詞の意味や実感、私の刻んだ年輪と環境により、驚く程の落差があるようだ。

少年時代、航跡を引いて、ロースク岩に別れを告げて札幌に出た頃。

古平を故郷とする三人の幼い子と、病妻を札幌に残して単身赴任の東京までの旅。霞ヶ浦の海軍航空隊の所屬が変わり、次第に南下して行く軍人時代。

遂には、黒潮の喰る東シナ海の巡洋艦上で生涯一度ッ切りの

海戦まで体験させられた。

ふるさとが遠くなることは、何度体験しても地の果てまで行くような寂寥が伴う。

窓あけて窓いっぱい春

山頭火

つい先程、ふるさとの高野名正治さんからうれしい絵はがきが届いた。春霞の天空に靄う陽光の中で、飛天が舞う楽しい仏画の上にあつた句でした。

思いを飛躍させると、遙かな二千数百年前、小さな都市国家

とはいえネパールのふるさと、王子の地位も捨てて旅に出た一人の哲学青年、妻子を捨ててまで出家にこだわった、彼ゴータマ・ブツダ（釈尊）の心は知りようもない。

ブツダガヤの、菩提樹下での瞑想に耽つた後、何を悟り、わ

が生命に活然と開いた法とは如何なるものだったのか。

それはさておき、すでに八十歳を過ぎた肉体が、最後に向かつていたのは故郷カビウであつたようだ。

故郷はまだ遠く、クシナーラーの町で、遂にサーラの双樹の許に横たわつたと記されている。

人間釈尊の偉大さは、死の最後に至るまで、己の悟り得た生命に秘められた尊極の仏界が、何人にも存在し、何人もそれによつて幸福を得ることの必然を、説いて止まなかつたことだ。

われ一人悟りすまして、超然と、他を見下すような人間ではなかつたことだ。

それにしても、釈尊が予言したとおり滅後二千数百年の後、堂塔伽藍をきらびやかに飾り立て、その中に安住して法の何かを説けぬ仏法者の多いことよ。

ふるさとは、仏の説く、わが尊極の生命を出生させた場所である。厳しく因果の理法を説く仏教を信じれば、あくまでも偶然などとはあり得ない。

ひとしきり話題となり、流行語にもなった「自己責任」と、通底しているとも思える。

「こんな家に生まれたくなかつた」

「何で、もつとマシなところに生まれなかつたのだらう」と、ボヤいてみたところで、ふるさとや、父母の責任はない。

自分で決めて、自分で勝手に生まれて来ただけのようだ。

ならば覚悟を決めて、生ある限り、幸福の軌道に乗るように「自己責任」を定めるべきであらう。

電話が鳴り、余市町に嫁いでいる河端邦子（旧姓福岡）さんの懐かしい声が転んだ。

戦後の古平で、私が最も安らぎの場所になっていた福岡家で、彼女のお父さんやお母さんから、どれ程安らぎの時間をいただいたことやら。

ふるさとは、そこで交流した人達が知らぬとはいいい、遙かな過去世から縁ある人達であり、ふるさと・古平を因として、再び若々しく再会するのもかも知れない。古平を大事にしよう。

あー勘違い!

通称・予科練の仕立て屋、細谷和夫と仲が良くなり、休日の外出にはよく一緒に出かけた。

気屯の警察官だった船木さんのお宅にも度々遊びに行っ

たが、船木さんの奥さんは大変気さくな方で、細谷の親戚に当たるとか。

私も外出の時は地方ではもう手に入りにくくなってきた石けんやタバコなど持って行くと大喜びで、ジャガイモを大鍋でゆでて、バターをつけてご馳走してくれたり、時にはどこからかお酒を調達してきて飲ませてくれた。

ある休日、例のごとく細谷と二人で船木さん宅に上がり込んでお酒をご馳走になっていたら、突然、「橘、いるか?」と、玄関で声がした。

斉藤敏美上等兵と同年兵の山下弘だ。つわもの荘で一杯飲んで来たらしい。船木さんの奥さん

が「どうぞ、どうぞ——」と誘って、二人とも上がり込んで四人で酒盛りを始めた。

私は斉藤上等兵の人柄が好きで「曹長殿」と呼んでいる。上等兵は星が三つだが、それに金

筋が入れば曹長だからそう呼んでいる。また

山下弘を副官と呼んでいた。船木

さんの家は二軒続きで、隣の家

でもどこかの中隊の下士官連中

五、六人が遊びに来ていて、盛大

に酒盛りでもしているのか騒いで

いるのが聞こえる。

その内、急に話し声が聞こえなくなったので帰ったものだと思っていたら、後で奥さんから

の話聞いて、大笑いをした。なんでも隣の奥さんの話によると、私達が酒の勢いで「副官

殿」とか「曹長殿」とか言っているのが聞こえたようで、隣に

いた連中がてついきり連隊のお偉方が来ているものと勘違いし

て、これはと敬遠して退散したらしい。

副官といえは中尉か大尉で、大隊本部と連隊本部以外にはい

なかったから、これは相当に驚いたようだ。後で真相を知つ

て、船木さんの奥さんと隣の奥さんも腹を抱えて笑い転げた

そうだった。

武意加で軍道建設

昭和一九年六月、国境近くの武意加に、私達の第一大隊は一個大隊を収容できる半地下式の陣地を構築することになり、二

中隊はそれに付随する軍道を担当することになった。

気屯の連隊から武意加まで歩いて行くことになったが、これは相当な距離である。途中、古

屯兵舎の衛門の前で食事となった。私の兄、金光がここにいます。私達二中隊の軍道建設工事は

はずだと思い歩哨に聞いてみたら、すぐ目の前にある兵舎が兄のいる中隊の兵舎だと教えてくれた。地方人なら、「ちよつと会いに行つてくるぞ」となるが、そこが軍隊の辛さで、

実の兄が目と鼻の先にいるのに逢うこともできない。それが軍隊だ。

食事が終わるとすぐ出発の号令がかかった。古屯から東を指して進み、途中で北に向きを変え、山道の丸太道を歩いたよ

うな記憶がある。何しろ丸太がむき出しの道路だったので歩くのが大変だった。

やつと着いた武意加はきれいな武意加川が流れ、見渡す限りの白樺の原始林だった。それを切り倒して幕舎を張り、一個大隊全員が生活を始めた。

私達二中隊の軍道建設工事はツンドラ地帯なので、泥炭地が多く、太い松の丸太を切り出して縦に四本並べ、その上に横に丸太をすき間なく並べて土を盛り、その上に砂利を敷くとい

う、体力のない私には相当にきつい作業だった。

(続く)

「連作」

古平まで

坂本 甚 衛

(六)

訪 町 (2)

妻となる女の家の畑は摺鉢山の中腹にあった。彼女は種芋を背負い、私は肥桶を天秤で担いで禅源寺裏の墓地を抜け四、五日通った。通路脇のカラマツ林は淡い緑をびっしりと芽吹き、五月中旬の空はライムのようにつややかで新緑の匂いがした。

先日、大火後の検分を終えてから、彼女は町内の目ぼしい場所を案内してくれたが、禅源寺の五百羅漢以外、さして見るべきものもなかった。野村泊月や高野素十の句碑を知ったのも後のこと。

それより何となく好印象を抱いた風景は禅源寺裏の墓地だった。普通、日本の墓地といえは外国と違い、何か陰々滅々たる

たる感がある。私の生地においても夏の夜に行われる度胸試しなどでそれは明白である。だがこの墓地は周りに樹木が少ないうえに傾斜地に陽光が跳ねる中、古平に生き、没して眠る幾多の霊がさも微笑んでいるかに見える。死者が集う小公園とでも呼ぶべきか。

さにもう一つ、午後の一、二時、ポーツと汽笛の音がしてシヤコタンブルーといった薄藍の海を、余市からの連絡船が滑るように近付いて来るのが山腹の畑から見えた。右下に広がるカラマツの樹林と相まってさながら一幅の絵を見るようだった。もしカラマツでなく蜜柑の樹々だったとしたら、瀬戸内海の風景といっても信じたに違いない。それ程周囲の自然と船は見

事に合致していた。

五、六日の滞在中、弁当は別にして彼女実家での昼食は主に煮た馬鈴薯か南瓜だった。米どころのわが生地ですらついで、五年前の戦時中は、米七雑穀三の割合で混ぜ食すよう半ば義務づけられていた。食料がまだあり余っているとは言えないこの時代、こしょ芋や南瓜を産するに適した北海道の住民が、ご飯の代替え食にそれを食べていたとしてもうなづける話であった。こしょ芋は薄甘く味付けし、こしょ芋には極めて美味しく感じられた。当時の古平で、彼女の実家が格別貧しくそんな昼食だったのか、或は一般の町家が等しくそうだったのか私は知らない。ただ北国の海浜に生きる人々を卑しめて言っているのではないのは確かである。

余市に居住したのは仕事上の必要からだった。札幌への通勤に便利だからだ。余市とてそう近くはないが、私の場合出張旅行が大半だからといって支障がない。ただし一か所が終了次第、次の調査までコア(資料)

の整理や柱状図なる図面作成のため帰札する要がある。当然その時は余市からの通勤となる。役所の寮があるにはあるが勿論泊まる気がしない。多少遠距離でも妻子の住むところから通いたいのが人情だろう。

余市に住んでみてその利便性に得心した。米が穫れ、果樹があり、魚が獲れる余市で暮らせない奴は、どこへ行っても暮らせないとこの譬えは、全く私を同感させた。

後志地区で永年小・中学校の教員を勤め、定年になった人々が余市に家を建て定住する理由が分かった。各地から集まった人が多いせいか全てが開放的に感じられる。その点、引越して来た古平の保守的な閉鎖性とは著しく違った。恐らく私はここで果てるだろうと予想し家も建てた。墓所もそろそろ用意しようかとさえ思った。

ところが人生一寸先が闇だった。突然体調を崩し入、退院を反復したあけく、一度捨てた古平へ半世紀ぶりに再び舞い戻る仕儀になったのである。宿縁と

古平を訪れた俳人たち

古平には、特に大正から昭和初期にかけて多くの著名人が訪れ、時の政治家をはじめ画家や書家、昭和に入ってから俳人が目立つようになった。

昭和五年、道内でもよく知られた齊藤雨意と石田雨圃子が来町し、続いてホトトギスの同人としても有名な野村泊月を迎え、後に道新の選者にもなった石田雨圃子らが同行した。

←高浜年尾（古平）にて



当時、町内でも俳句熱が高く、その指導を受けて大いに活気を呈した。その時の泊月の一句『蝦夷の古都古平浜の盆の月』は句碑として残っている。



↑皆吉爽雨 詔にて (昭和49年撮影)

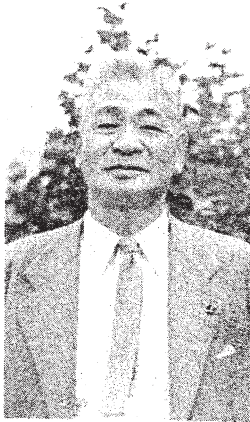
同一七年には『高潮』主幹鈴木寿月、戦後になって同『五年雪解』主宰皆吉爽雨、八月にホトトギス主宰高浜年尾と田畑比古の一行が訪れ、古平の盆踊りを見て、その一文を俳誌『ホトトギス』に載せている。

野村泊月（前列左から三人目）
←石田雨圃子（戦後にも来町も）



同二七年、ホトトギスの四Sと言われた一人である高野素十が、吟行の途中請われて古平に立ち寄った。俳句愛好者たちと座談の中で指導もし、『ふるさとを同じうしたる秋天下』の一句が句碑として建っている。

←高野素十（昭和三〇年撮影）



いふべきだろう。

移って来て、現実はこの町で長く暮らしている人々と、私みたいなよそ者、いわばエトランゼでは自ら見えてくるものが違う。それに気付いた。こんなことは余り書きたくないが、古平礼賛ばかりが能じやない。陸の孤島と謳われた昔から、今でも一部の男女に伝わる排他性、例えば、本年一月初めて『せたかむい』に載せた拙作を見た港町在のある女が妻の親戚に話したという。

「随分立派な家に住んでいたらしいけど、そんなら何も古平の田舎まで引越して来る必要なかったじゃないの」と、表面しかなぞらず、真意まで探ろうとしない自己中心的で、こばみともとれる無知な女のお節介に、いささか大人気ないが有り難くて私は思わず泪が出そうだったほどである。



*都合により【俳句鑑賞】は
今月お休みです。次号にご期待ください。



吉平町岬短歌会

この辻を狭しと遊びし遠き日よ空晴れわたり海風やさし
三代のまどる願ひて建てし家子ら遠く住み吾は老いたり

池田 テル

愛らしきカタクリの花食卓にかざりて思ふ今日は母の日
それぞれに色鮮やかな山菜は落竹の子とわらびの緑

田中 香苗

土手脇に見向かれもせぬ落のたう高々と伸び没り日に染まる
山の空気ひろがりやうな香りたつ緑の太き独活の皮むく

堀 典子

何なすも夫のおかげ仏前に明日より普請と長く座りぬ

鈴木 時子

宛名書きは文字より字配り大切と父に言はれしを今も忘れじ

丹後 初江

羊蹄山よていの登りゆく道をエゾライ鳥トントンとゆく後に続けと

寺内 りよう

動かねば動けなくなると自に言ひて出でし畑に雑草を刈る

東 美知



吉平俳句会

一步づつ伝ひ歩きや孫の春 斉藤波留

返す浪寄せて来ぬ間に桜貝 山口悦子

散歩道風に囁零れくる 越野敏雄

春愁や潮鳴り遙か句集成る 大和田絵伊

烏賊船の見送りをせし漁夫家族 福井幸平

三月は名のみ岩肌まだきびし 高橋重子

短めのスカート楽し五月風 仲谷比呂古

春雷の山も一気に弾みをり 室谷弘子

久々の孫に逢ふ如露のたう 泉清三

老二人縁側でお茶長閑なり 外山俊久

春光や揚々として海に差す 渡辺嘉之

春光をあまねく受て波光る 堀典子

花の忌を終へ黙々と夜の電車 越野清治

古平町史年表

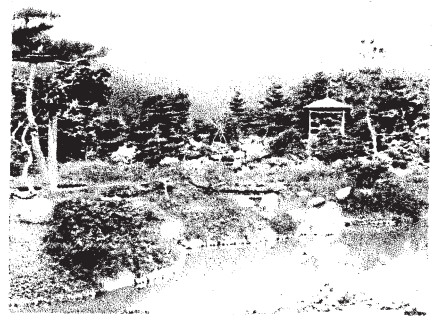
昭和7年 (1932) ~ 続き

- ▲ 初めて町内に消防自動車が配備され、小学校の避難訓練に出動する
- ▲ 警察署・電気会社・鎌合同漁業(株)が合同で、①公園(偕楽園)で観桜会が開かれる
- ▲ 町内で神威岬見学の積丹周遊団が募集され、110人余りが共栄丸で出発する
- ▲ 種田富太郎が道会議員に再選される
- ▲ オタモイ地蔵尊参詣団 150人程が共栄丸で出発する
- ▲ トラホーム予防と乳幼児相談について、警察署がビラを配布し啓蒙宣伝をする
- ▲ 古平森林組合設立の協議会が開かれる
- ▲ 古平連合青年団が主催し、積丹岳登山が行われる
- ▲ 種田干場で一流・二流に分けて、自転車競技会が行われる
- ▲ 浜町に原田医院が開業する
- ▲ 大謀網でゴンタマグロ5千尾余りの水揚げがあり、金額にして5千円余りの大漁となる (その後も終漁までに1千尾を超える漁獲が2回あった)
- ▲ 本陣の浜船着場を信用組合の事業として行うことが総代会で決定する
- ▲ 本陣の浜船着場造成後援会の発会式が小学校で行われる
- ▲ ジフテリアが流行し予防注射が行われる。70余人が罹患し、7人が死亡する。古平小学校が消毒のため臨時休校する
- ▲ 町内の不在漁業家に対する課税が訴訟問題になり紛糾する
- ▲ 新地町古盛座で初めてトーキー映画が上映される
- ▲ 婦人会が主催し、禅源寺で布教師の講演会が開かれる
- ▲ 町の産業として除虫菊の栽培奨励案が町会に建議される
- ▲ 船入潤建設工事で作業員がケーソンから落ちて重傷を負う
- ▲ 浜町方面で、本陣の浜船着場建設の運動費として寄付金を集める
- ▲ 昨年に続いての冷害により、水稻は平年作の1割程度という凶作となる
- ▲ 凶作などによる救済工事として、1条通り役場までの側溝と土盛り工事が行われる

古平
名所
偕楽園之景

品田寫眞館發行

古平町・品田寫眞館が発行した「偕楽園」寫眞集
→寫眞集の袋と園内の風景↓



↑ 積丹・余別村周遊記念スタンプ



↑ 古平漁協市場に並んだマグロ (昭和40年代)